

044 王 制

●アッシリア、バビロニア、エジプト、カナンの小国など、イスラエル周辺の国は王によって治められていた。それにもかかわらず、**イスラエルでは王による中央集権的な体制は、BC1000 頃まで現れなかった**。それまでは「イスラエルには王がなく、それぞれ自分の目に正しいとすることを行っていた。」（士師記 21:25）

●士師の時代（ヨシュア以後の王国時代の前から預言者サムエルの間まで、古代イスラエルを裁いた人々であり、旧約聖書『士師記』に描かれる指導者：大士師（オトニエル、エフド、デボラ、ギデオン、エフタ、サムソン）、小士師（シャムガル、トラ、ヤイル、イブツァン、エロン、アブドン）は、イスラエル諸部族はそれぞれ独立した存在であった。**共通の敵に襲われれば、神によって選ばれた「士師」という指導者の下、団結して戦った。**

●しかし、敵の攻撃が頻繁になるにつれ、イスラエルの民はより安定した指導者を求めるようになり、「今こそ、ほかのすべての国々のように、我々のために裁きを行う王を立ててください。」と要求するようになった。（サムエル記上 8:5）→参考：サムエル記 8：1～22

●しかし、この要求は深刻な問題をはらんでいた。困難な状況に対処するには強い軍事的指導者が必要だが、「ほかのすべての国々のように」ということは神との特別な関係を否定することになった。イスラエルの民はモーセの時代から「人間」を王とするのではなく「神」を王とする神の民だったからである。

●そんな中、預言者であり、最後の士師であるサムエルは王を立てることの危険を人々に告げる（サム上 8:11～18）。

●そして、このことを神に問いかけると、神は王制への移行を許した。しかし、その王は神が選ぶ王でなければならず、神の目に見えない統治を目に見えるものにするという義務が王には課せられた。これによって王は民を治めるが、神が引き続き民を統治するという形が取られた。

●旧約聖書における王制への評価は肯定的な部分と否定的な部分がある。例えば、初代の王サウルは王位に就いて間もなく、神に任せられた指導者としての役目を忘れてしまい、その治世は悲劇的な結末を迎えた（サム上 15 章）。一方、**ダビデは神に忠実な王**の模範とされる。神はダビデの忠実さに応えて、ダビデの子孫が絶えることなく王位に就くと約束した（サム下 7 章）。ダビデの後、王のなかには律法に従わず、神の命令に沿わない政策を行う者もいた。**神に不従順な王**はすぐに忘れ去られてしまうことが多かった。ヒゼキヤやヨシヤ王は最善を尽くして神に仕え、神に祝福されて長く王位にあった。

●400 年にわたるイスラエルの王制は、（1）BC722/721 に北イスラエル王国がアッシリアによって滅ぼされたときに片翼を失い、（2）BC587/586 に新バビロニア帝国が南のユダ王国を滅ぼし、ゼデキヤ王と指導者たちを捕囚として連れ去ったときに完全な終わりを告げた。